

# 島守 静翠居(しまもり・せいすいきよ)

## 1、プロフィール

絵の修行期に、秋声会系の「木太刀」に投句、大谷碧雲居と交友。大正 12 年以後八戸に帰り、「奥南新報」、俳誌「玫瑰」(はまなす)の選者として地元俳壇の指導に尽力した。

<生没>

1881(明治 14)年6月1日 ~ 1954(昭和 29)年 12 月1日

<代表作>

『こがらし 島守静翠居遺句集』

<青森との関わり>

八戸に生まれ日本画を志して上京、大正 12 年以後帰郷し、地元新聞・俳誌の選者となるなど指導的立場にあった。

## 2、作家解説

明治 14 年八戸市に生まれる。32 年上京、画家梶田半古の内弟子となる。半古が尾崎紅葉の作品の挿絵を描いていた関係で、紅葉邸に出入りし俳人星野麦人を知る。その主宰する俳誌「木太刀」(秋声会の機関紙「卯杖」の後身)で俳句を始める。この他の俳句歴は、関係資料が関東大震災で失われたために余り明らかでない。俳句の交友とし秋声会系の角田竹冷、岡野知十、渡辺水巴の俳誌「曲水」を戦後継承した大谷碧雲居らが挙げられるのみである。

明治 35 年から 40 年まで軍籍にあり、日露戦争の後の台北に駐留していた時、浅水又次郎の推せんにより、台湾日日新聞俳壇の選者となった。そのあと、大正 12 年まで画業に専念する。大正 12 年関東大震災に罹災後、母の強い願いで帰郷する。昭和 7 年八戸の奥南新報の乞いにより同俳壇の選者となり同紙廃刊(16 年)まで続く。また 3 年に創刊された「みちのく」および南巒社(なんらんしゃ)を指導した。16 年後者の解消とともに玫瑰社(はまなすしゃ)を創立、俳誌「玫瑰」を創

刊する。17年戦時統制によって「みちのく」と「玫瑰」とが統合され「みちのく」となったが、それも19年廃刊となる。戦後23年「玫瑰」を復刊して選者となる。この年「デーリー東北」俳壇選者となる。25年「玫瑰」廃刊。翌年八戸俳壇の一本化を提唱し、八戸俳句研究会ができると顧問となる。29年12月1日死去。享年74歳。

加藤楸邨が「風土を通して自分を生かす」「根づよい力を持つ」と称した句。

セルを着て素足の白き男なる  
抱鶏ののんどや遠きはたた神  
こがらしやわが明け暮れに岳一つ

### 3、資料紹介

○『こがらし 島守静翠居遺句集』

図書

1963(昭和38)年2月10日

177mm×120mm

編者は豊山千蔭・豊山英子。発行所は雪樾書房。巻頭に著者の遺影、稿本「吾等の句作態度」の一部複写写真、巻末に著者の略歴、加藤楸邨の「あとがき」、編者の「附記」を掲載。

「南巒集」306句(昭8～20)「はまなす集」38句(昭20～29)の二部立て総句集344句。